

1.

早春の北イタリアの美しさは格別だ。凜とした冷気と柔らかな陽射しが入り交じり、咲きほころびた樹々の花々が山野を彩る。うっすらとピンク味を帯びた白く煙のような梨や杏、鮮やかな黄のミモザ、しなやかな浅緑の若葉。灰色の長い冬を経て再び戻ってきた豊かな自然の色が、人々の心を浮き立たせ、萌え出る生命の歓喜が旅する者にも伝わってくる。

そんな春の大地に、はるばる日本から柿の苗木がもたらされた。2000年3月、ヴェニスの小島ブラーノの果樹園で、ミラノの北西、ロンバルディアの山間の小島カッシャーゴで、「時の蘇生」柿の木プロジェクト実行委員会により、被爆柿の木2世の苗木の植樹が行われた。55年前の長崎で被爆した柿の木から生まれた、いとも頼りなげな枝振りの苗木の植樹に、老いも若きも市民たちの多くが立ち会い、新たな生命の到来を祝ったのだ。

よく晴れた日曜日の午前、ヴェニス各所の小学校から教師に引率された子どもたちがブラーノに集ってきた。広い果樹園一杯に散らばって、それぞれに柿の木にまつわる絵を描いたり、詩を書いたり、凧を造ったり、紙細工の凧を造ったり。そんな思いの時の時を過ごし、心尽くしの昼食を摂った後で、いよいよ植樹式だ。子どもたちの歓声に包まれ、果樹園の片隅に苗木が植えられる。剥き出しになった細い根をいたわるように土を掛け、水を遣る。死の淵から蘇生した生命の連鎖の一片として現前するちっぽけな苗木が、異国の大地にいま根を垂ろす。

カッシャーゴでも、土地の人々の歓待は熱烈なものだった。ルネサンス風の邸館での市長や枢機卿も同席した厳粛な歓迎式典。眼下に光る湖面を眺めながら聴く子どもたちの歌声。そして、教会堂の前庭での大勢の市民や子どもたちに囲まれての植樹式。市長の手で苗木が植えられるや否や、色とりどりの風船が放たれ、空に向かって飛んでいく。爆発する歓喜。植樹式もさることながら、カッシャーゴでは実にさまざまな催しが行われた。柿の木プロジェクトに触発された子どもたちの造形作品による展覧会、さらには土地の作家たちによるグループ展、被爆をテーマとしたインスタレーション作品の発表までである。ワークショップにしても、身の回りのもの—マツボックリや木の葉、瓶の王冠など—を使った工作、紙で柿の木を造ったり、詩を作ったり、お話を聞いて絵を描いたり、坂道にチョークで絵を描いたりといった具合に、驚くほど多彩で、しかも子どもたちが無理なく参加できるものが多い。事実、多くの子どもたちが父母と一緒に心底楽しんでた。春の一日、小さな町が文字通り柿の木プロジェクト一色に染まった。柿の木プロジェクトが伝えようとするものを、人々が積極的に受け止め、共感し、正に市民ぐるみ、町ぐるみで植樹を実現させたと言うべきだろう。柿の木プロジェクトが意図していたことは、こうしたことだったのかと素直に合点がいった。

2.

ブラーノとカッシャーゴにおける柿の木の植樹は、前年のヴェニス・ビエンナーレに始まるものである。同展カタログ第一分冊に書いたとおり、日本館の展示は、宮島達男と彼が創始した「時の蘇生」柿の木プロジェクト実行委員会による変則的なグループ展の体裁を取った。

宮島は彼にとって最大規模の作品となる2400個の発光ダイオード・ガジェットから成る「メガデス」を発表した。展示室の壁三面を取り巻く、比較的ゆっくりとした速度でカウントダウンする青いLEDが宇宙的な広がりや静謐な美しさを実現した。のみならず、展示室の向かって左奥の領域に観客が入り込むと、センサーが作動し、すべての光が消え、完全な闇が訪れる。無限にも思える闇の時間—実際は1分30秒程度—が過ぎ、再びひとつ、ふたつとLEDが灯りはじめ、

次第にその数が増え、しばらくするうちにまた元のように三面の壁で光が瞬きはじめる。あたかも、無人の野に文明が伝播していくかのように。20世紀を大量死の時代と要約するとき、突然の闇の到来と再点灯は、正に滅亡と復活のアナロジーとして象徴的意味を有し、この上なく美しく崇高な瞬間であった。

「メガデス」が20世紀の総括であるとするれば、「時の蘇生」柿の木プロジェクトは21世紀における美術のあり方を示唆するものである。「メガデス」の展示室とは対照的な白く明るい空間の中央に柿の苗木を置き、その周りを取り囲むように、4つのコーナーが配列された。即ち、1.プロジェクトの基本的なコンセプトを紹介するコーナー、2.植樹やワークショップ等の資料を収め、観客に自由に観覧してもらう一種のアーカイブとしてのコーナー、3.観客が柿の木へのメッセージを書き、壁に貼りつけていく参加のコーナー。ここでワークショップも行われた。4.植樹の希望を募るコーナーである。従来のような意味での作品が展示されているわけではない。いわば、苗木を一種の結節点として観客と実行委員会、あるいは観客相互のコミュニケーションが成立し、増殖していく。そして、最終的にはヴェニスにおける植樹こそが目標とされた。つまり、柿の木プロジェクトは日本館の展示において完結するものではなく、本来的にその時空の外に伸び広がっていくことを意図していた。

たとえば、ビエンナーレのオープンの4日前から、実行委員会は「柿の木カフェ」と称し、日本館前庭に椅子とテーブルをセットし、午後のひととき日本茶のサービスを行った。展示作業に疲れた各国の作家、キュレーターたちが、三々五々訪れ、図らずも自然な交流の場面が現出した。柿の木プロジェクトについて知ってもらい、ついでにメッセージカードを書いてもらう恰好の機会ともなった。これらのメッセージカードは展示に使用され、観客の参加を誘うこととなった。

柿の木プロジェクトの展示はスタティックで固定的なものではなく、常に変化し、新たなものが付け加わっていく。メッセージカードは正にそうしたものであったし、オープン時を含め、会期中何度かにわたり行われた子どもたちを対象としたワークショップは、日本館の展示自体をアクティブで生き生きとしたものにした。こうした要素の導入によって、ヴェニス市民にとかく専門家のためのものと受け止められていたビエンナーレはより開かれたものとなった。

3.

ヴェニス・ビエンナーレの日本館において、この種のワークショップが行われたのは初めてのことである。柿の木プロジェクトでは、これまでも世界各地での植樹に際して、それぞれの土地の作家による子どもたちを対象としたワークショップを行ってきたこともあり、ヴェニスでもワークショップを実施することが柿の木プロジェクト実行委員会から提案された。ビエンナーレ事務局から許可を得なければならず、また管理上の問題や経費的な問題、子どもたちをどう集めるかなど、さまざまな課題があったが、最終的に6月に3回、7月に1回、10月に2回、計6回のワークショップが日本館において行われた。実行委員会からはさらに多くのワークショップを行いたいとの要望もあったが、日本館の人的対応能力に限界があることから、公式のワークショップとしては上記のものに限定し、幾つかのワークショップは日本館の管轄外で行われた。

このうち、筆者が直接立ち会うことができたのは、オープン直後の最初の日曜日に行われたHANADA+K.blumfeldtのワークショップである。ワークショップは、苗木の周りに集まった子どもたちに、長崎への原爆投下について、被爆を生き延びた柿の木について、そして沈み行く都市ヴェニスの「水」について語ることから始まる。次いで、インストラクターである花田ハイケが、水を満たした木製の舟形容器を抱えて登場する。会場には、既に顔料を入れた小さな紙の舟

が数十個吊るされ、その下には白い布が水平に張られている。子どもたちは木の器から水を掬い取り、紙の舟へと移す。紙の船の顔料は水に溶け、次第に滴り落ちて来る。子どもたちはその色のついた水を絵筆につけ、布一杯に描きながら、勢い良く絵具を飛び散らせ、喧騒状態の中、瞬間に抽象表現主義風の画面ができあがった。格別に描画法を指導するわけでもなく、子どもたちのエネルギーが巧みに引き出され、自然と作品が形作られていく。柿の木木存在に触れ、体験することで、子どもたちの感性が触発され、表現へと駆り立てられていく。それこそが柿の木プロジェクトが目指していることである。

この外、6月には三嶋りつえによる折り紙のワークショップ、清水淳によるアニメーションで映し出される動く線をなぞって線描していくワークショップ、7月には木谷安憲による「記憶」や「未来」をテーマに絵を描くワークショップが行われた。いずれも、実行委員会メンバーないし協力者によるものであったが、特筆すべきは、10月に行われた二回のワークショップである。日本の作家だけではなく、柿の木プロジェクトに興味を持つ現地の作家にも参加してもらいたいという趣旨から、会期中、ワークショップの希望者を募集した。幸い何人かの応募があり、その中から選ばれたのがミケーレ・ドラセックとマッテオ・ベルテッリの二人であった。前者は、北イタリア・ゴリツィア出身の作家で、障害者施設に勤務したこともあり、そんな経験もあって柿の木プロジェクトへの参加を希望したという。ワークショップの内容は、切り抜いた厚紙を床に並べ、最後に実をつけた大きな柿の木を作り上げるというものだった。後者は、ヴェニスの美術学校生であり、4面のキャンヴァスに春夏秋冬、それぞれの柿の木を描くというワークショップを行った。

さらに、公式のものではないが、オープニング当日には、日比野克彦が自らデザインした柿の木風呂敷を用いたワークショップを、7月には古川弓子が、ピエンナーレ会場外の公園の一角でカフェを開き、土地の人々とコミュニケーションを図るというワークショップを行った。

これら一連のワークショップは、柿の木プロジェクトに共鳴し、触発された作家たちが自発的に企画したものである。そして、作家たちの行為に促され、親に連れられた子どもたちがワークショップに参加し、なにがしかの表現を生み出していく。それはまさに苗木を媒介として、関係の輪が増殖していく過程に他ならなかった。子どもたちは、ワークショップでの体験を通じて、柿の木を、そしてその背後にある戦争や被爆のこと、生命の尊さについてなど、記憶に留めていくことだろう。たとえワークショップに参加せずとも、展示の評判を伝え聞き、小学校単位で見学を訪れるなど、これまでのピエンナーレでは考えられなかったような事例が報告されている。

おそらくはそうしたことの成果でもあろう、5ヵ月余に及ぶピエンナーレの会期中、植樹の希望が次々に寄せられ、総数150件近くにも及んだ。地域的にも、イタリアの80件以上を筆頭に、ヨーロッパ各国、アメリカなど、広範な広がりを見せた。その意味では柿の木プロジェクト実行委員会は、所期目的を達成したと言えるかもしれない。最終的には、2000年春の植樹地として国内外の24カ所が選ばれたが、そのうちピエンナーレ展示の帰結として植樹地に選ばれたのが、前述のブラーノとカッシャーゴであった。

4. 柿の木プロジェクトの試みが、世界中でこれほど多くの人々に迎えられ、またこれほどの熱意をもって植樹が遂行されるのは、いったいどうした訳だろうか。おそらくは柿の木プロジェクトが、生命の死と再生という、きわめて普遍的で、人類の記憶にとって原型的とも神話的とも呼びうる主題を内包しているからではないか。

春は蘇りの季節である。冬の間、死に絶えていたかに見えた、すべての生命が再び蠢きはじめる。太陽の運行とそれに伴う季節の経巡り、そして生命の循環—誕生し、成長し、老い、やがて死を迎え、再び蘇るという自然のサイクル—とは、洋の東西を問わず太古から人間の想像力のなかで重ね合わされ、種々の宗教的祭儀を生み出してきた。ヨーロッパにおいても、キリスト教以前の民間習俗に見るように、春は復活の季節として、豊かな実りと生産への契機として受け止められてきた。とりわけ春に芽を吹き、青々とした葉を繁らせる樹木は、生命の蘇りをシンボライズするものとして崇拜されてきた。ヨーロッパの農民の間にあまねく行われてきた、「五月の樹(メイ・ツリー)」、「五月の棒(メイ・ポール)」と呼ばれる習俗はその典型と言えるかもしれない。

人類学の古典、『金枝篇』のなかで、フレイザーはこう述べている。「ヨーロッパの多くの地方では、春、あるいは初夏、あるいは夏至の日にすら森林に入って行って樹を伐り倒し、それを村へ持ち帰って村人たちの歓呼に迎えられて立てたり、森林へ行って樹の枝を切りとり、それを各戸に結び付ける習慣があったし、それは今でもまだあるのである。このような習慣の目的は、樹木の精霊がその力のうちにもっている祝福を、村やめいめいの家へもち帰るところにある。それで各家庭がその恩恵の分け前にあずかろうと、めいめいが自分の家の前に「五月の樹」を植えたり、村の「五月の樹」を戸ごとに運びまわったりする習慣があるわけである。」¹

「五月の樹」は、生命の蘇りの歓びを春に芽吹く樹木に託したヨーロッパの民衆の心性を象徴的に示している。否、あえて「五月の樹」を持ち出さずとも、春、一斉に花開く樹々の美しさは人々の心を歓喜させ、高揚させるに十分である。それゆえに、春の一日、かぼそい柿の苗木を植えることは、巧まずして人々の感情の古層に触れることであったに違いない。おまけに、柿がヨーロッパの固有種ではない、東洋原産の樹木であることによって、その移植は文化の転移、異文化間のコミュニケーションによる相互理解の可能性といったことにも言及することにもなる。日本文化の伝統の中で、古来種々の説話に登場してきた柿には、固有の文化的・民俗的イメージが付着している。植樹は、柿の木のような文化的背景をも物語ることになる。さらに、柿の木は長崎への原爆投下という歴史的事実をも負っている。つまり、柿の木プロジェクトにおける植樹は、人類学的、文化的、歴史的、多層的なさまざまな意味の重なりの中に位置づけられる。それゆえに、柿の木には文化的な差異を越えて、さまざまな側面からのアプローチが可能であるし、根源的な生の証として世界中の人々の共感を誘うのである。

宮島達男のLED作品の根底には、「それは変化しつづける。それはあらゆるものと関係を結ぶ。それは永遠に続く。」という三つのテーゼが横たわっている。考えてみれば、柿の木プロジェクトこそは、この三つのテーゼをより分かりやすい形で実体化したものに他ならない。長崎から遠く離れた地に植樹され、成長し、やがて実を結び、年ごとに人々に恵みを与えていくであろう柿の木。すなわち、柿の木は変化しつづける、あらゆるものと関係を結び、その生命のある限り永遠に存在し続ける。

宮島達男のコンセプトは、この二つの一見したところ全く異なる様相の仕事の間を通底し、一つに結び付けている。青く瞬くLEDの光も、柿の木プロジェクトも変化しつづける、あらゆるものと関係を結び、永遠に続いていく。ブラーノで、カッシャーゴで、そして世界のさまざまな場所で。これまでも、これからも、いつまでも。

註1. J.G.フレイザー『金枝篇』(一) 永橋卓介訳 岩波文庫 1992 p.258 (原著は1890年刊)